

第五章 街道と埋蔵文化財

第一節 大内峠の茶屋跡

一．陶磁器（陶磁器1～12）

陶磁器は、第1図①～第12図①の66点を図示または採択した。基本的には陶器と磁器に区分し、さらに器種別・生産地・施釉別に分類した。器種は碗（飯碗・湯飲み碗）・皿（大皿・中皿・小皿）・ひょうそく・仏飯器・鉢・徳利・そば猪口・盃・甕・蓋物・花生・すり鉢などに分類される。生産地は、肥前系・会津本郷系・生産地不明が確認された。施釉法は呉須・コバルト・錆釉・鉄釉・白釉・灰釉・銅緑釉・透明釉などが確認され、さらに草花文・風景画・昆虫文などの絵付けがある。

図示した陶磁器は、すべて破片で約 $\frac{1}{3}$ から $\frac{1}{2}$ の遺存状況である。各遺物の詳細については観察表を参照し、計測値は主に遺存長や推定値を使用した。

各陶磁器を観察すると、峠の茶屋で使用したと考えられる日常雑器が多く出土している。破片数については表示しなかったが、出土状況から破損品を周辺に投棄したと考えられる。また、器酒については碗（飯碗・湯飲み碗）が多く、徳利や盃は少ない傾向が看取される。

二．銭貨（銭貨1～4）

銭貨は、総数で66点が出土している。各銭貨の計測については表1～3に記録した。また、観察については兵庫埋蔵銭調査会が

発行した『日本出土銭総覧一九九六年版』を参考にした。

近世の銭貨は、出土した銭貨の中で九割を占めている。主に寛永通宝が中心で、他に文久永寶・一分銀・一朱銀などがある。寛永通宝は寛永一三（一六三六）年から明治二（一八六九）年までの約二四〇年間にわたり鑄造・流通した貨幣である。時代的には、大きく三期に分かれ、一期の古寛永は、寛永一三（一六三六）年から万治二（一六五九）年、二期以降を新寛永と称して寛文八（一六六八）年から天和元（一六八三年）、三期は全国各地で鑄造された元禄一〇（一六九七年）から延享四（一七四七年）及び明和四（一七六七）年から天明元（一七八一年）年である。特に三期で鑄造地は全国に及び、その種類も千種類以上が確認されている。時間的な制約から、詳細な分類は困難なために、参考として計測一覧と表・裏（背）面の拓本を掲載した。

この他に、明治一九年と大正九年の一銭銅貨を図示した。

三．石製品（陶磁器12）

石製品は砥石・硯を含めて3点を図示した。砥石は、置き砥・持ち砥・粗砥・中砥・仕上げ砥に分けられる。小型なものから大型のものまであり、表面には使用痕も観察される。形態的には中型から小型なものが多く、石質はすべて細粒凝灰岩である。